

7. 住民の外来生物に対する意識調査

7.1 目的

宮古の人々が導入したイタチに対して、どのような考え方や感情を持っているかを把握することはイタチ対策を進める上で非常に重要となる。そこで、宮古諸島の住民へ直接ヒアリング調査を実施した。

7.2 調査地

調査は沖縄県宮古諸島(面積 226.50 km² 人口 53,270 人(国勢調査 2010 年 10 月現在)の宮古島(平良、上野、城辺、下地)・池間島・下地島・伊良部島・来間島とした。

7.3 調査方法

2017 年 7 月 3 日(月)～8 日(金)にあらかじめ用意した設問を記載したアンケート用紙(巻末資料)を用いて聞き取りを行った。市役所や食堂の職員の皆様には同じ内容のアンケート用紙を渡し、後日回収した。

設問は下の 10 項目とした。項目⑦の外来種は 20 種とした。

【質問事項】

- ①性別
- ②年齢
- ③職業
- ④子供の時育った場所
- ⑤現在の居住地
- ⑥外来種・特定外来生物という言葉を知っているか
- ⑦宮古諸島にいる外来種を知っているか(20 種)
- ⑧イタチが持ち込まれた目的を知っているか、今後に対する考え
また、宮古諸島で数を減らしている在来種を知っているか(6 種)
- ⑨宮古諸島内でイタチを見たことはあるか
- ⑩宮古諸島の在来種の方言名を知っているか

7.4 結果

(1) アンケート収集結果

1) 属性データ

アンケートは男性 77 名、女性 63 名の計 140 名から回答が得られ、中でも 40～59 歳の割合が最も多かった（表 7-1）。職業は公務員 44 名と農家 33 名が多い結果となった。

表 7-1 アンケート属性データ

年齢		農家	公務員	学生	その他	無職	未記入	計
20歳未満	男	0	0	0	0	0	0	0
	女	0	0	2	0	0	0	2
20-39歳	男	3	8	0	8	0	0	19
	女	1	4	0	7	1	0	13
40-59歳	男	6	25	0	10	1	0	42
	女	3	6	0	20	2	1	32
60歳以上	男	13	1	0	2	0	0	16
	女	7	0	0	4	5	0	16
計	男	22	34	0	20	1	0	77
	女	11	10	2	10	8	1	63

2) 子供の時に育った場所はどちらですか？

回答者が子供の時に育った場所について質問した結果、宮古島が最も多く約 68%、伊良部島が 10%と多く、県外は約 14%となった（表 7-2）。

表 7-2 子供の時に育った場所

場所	回答数
宮古島	95 (67.9%)
伊良部島	14 (10.0%)
沖縄県内	10 (7.1%)
池間島	1 (0.7%)
来間島	1 (0.7%)
県外	19 (13.6%)
計	140

3) 現在居住している地域地区はどちらですか？

現在居住している場所は平良地区が 50%、上野地区が 16%、城辺地区 12%、下地地区 7%と宮古島が 85%、伊良部島が 11%、来間島 3%、池間島が 1%となった（表 7-3）。

表 7-3 現在居住している場所

場所	回答数
平良地区	69 (50%)
上野地区	22 (16%)
城辺地区	17 (12%)
伊良部島	15 (11%)
下地地区	10 (7%)
来間島	4 (3%)
池間島	1 (1%)
計	138

③ 外来種・特定外来生物という言葉をご存知ですか？

外来種という言葉の認知度はどちらも知っているが45%、外来種だけが24%となり、両方を合わせると約70%と高い結果となった（図7-1）。

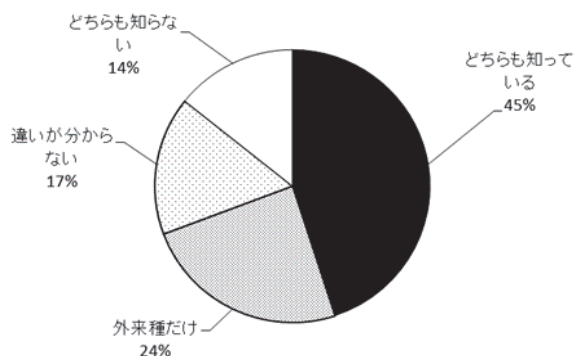


図7-1 外来種・特定外来生物を知っている人の割合

④ 宮古諸島にいる外来種を知っているか（20種）

身近でよく目にする動物であるイタチやノイヌ、ノネコ、インドクジャク、タイワンカブト、アフリカマイマイの認知度は高く、コウライキジ（本業務では未確認）やシロアゴガエル、ボタンウキクサなどあまり目にしないものは認知度が低い結果となった（図7-2、図7-3）。特にイタチとインドクジャク、アフリカマイマイは非常に認知度が高い結果となった。

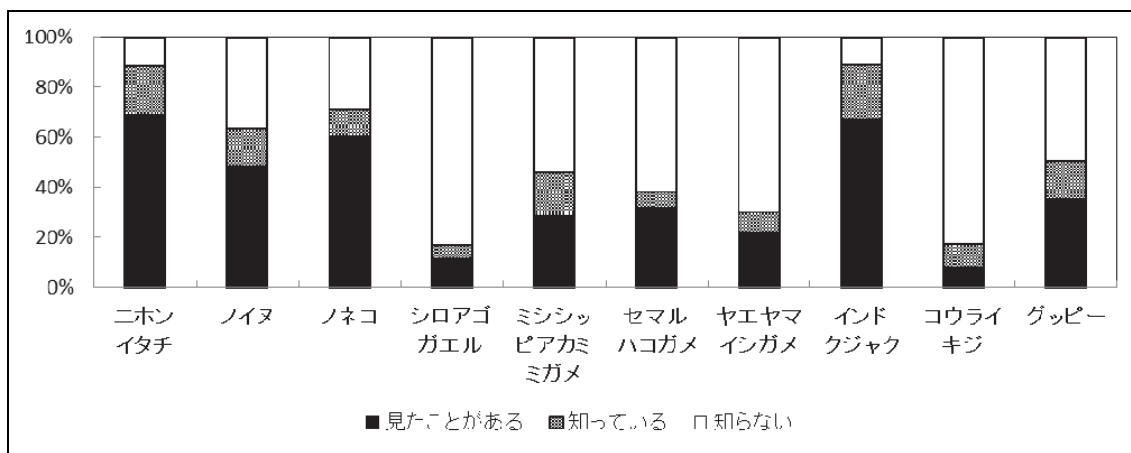


図7-2 外来種の認知率（哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類・魚類）

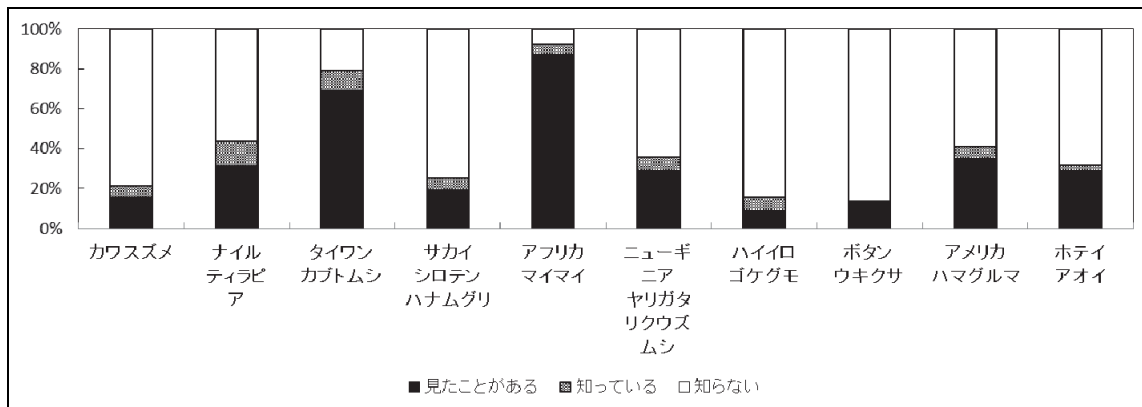


図7-3 外来種の認知度（魚類・昆虫類・節足動物・腹足類・植物）

⑤ イタチ及び在来種の認識について

1) イタチが持ち込まれた目的がネズミ駆除のためだったことをご存知ですか？

持ち込み理由は62%が知っているとの回答で、家族、親せき、知人から知るきっかけが57%と非常に高かった（表7-4～表7-5）。

表7-4 イタチの持ち込み理由の回答率

場所	回答数
はい	86 (62%)
いいえ	53 (38%)
計	139

表7-5 イタチ導入を知るきっかけ

知った方法	回答数
家族、親戚、知人	47 (57.3%)
テレビ	7 (8.5%)
新聞	5 (1.2%)
学校	2 (2.4%)
ラジオ	1 (1.2%)
インターネット	1 (1.2%)
持ち込みに関わった	1 (1.2%)
その他	18 (22.0%)
計	82

2) 持ち込まれた当初、また現在イタチをどう思うか。

イタチが持ち込まれたことに関し、持ち込み当初と現在でそれぞれどのように考えているかを示した（表7-6～表7-7、図7-4）。持ち込み当初は「良いこと」というのは38%、「悪いこと」が13%であったが、現在では「良い」と「やや良い」を合わせて11%、「悪い」と「やや悪い」が28%と持ち込み当初は良いことと考えていた人が現在は持ち込みが悪いことと認識している結果となった（）。職業別にみると、被害の当事者である農家は当初良いことと考えていたが、現在は良いことが減り、悪いことの認識に変化していた（図7-5～図7-6）。

表7-6 持ち込まれた当初の感想

質問項目	回答数	回答率
良いこと	32	38%
悪いこと	11	13%
関心なかった	33	39%
わからなかった	8	10%
計	84	100%

表7-7 今はどう思っているか

質問項目	回答数	回答率
良い	8	6%
やや良い	7	5%
どちらでもない	33	25%
やや悪い	11	8%
悪い	27	20%
関心なし	21	16%
わからない	27	20%
計	134	100%

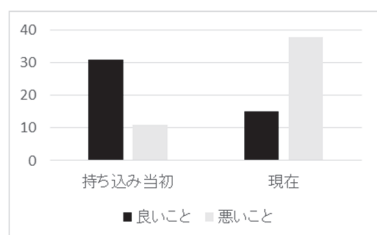


図7-4 現在と過去の意識の違い

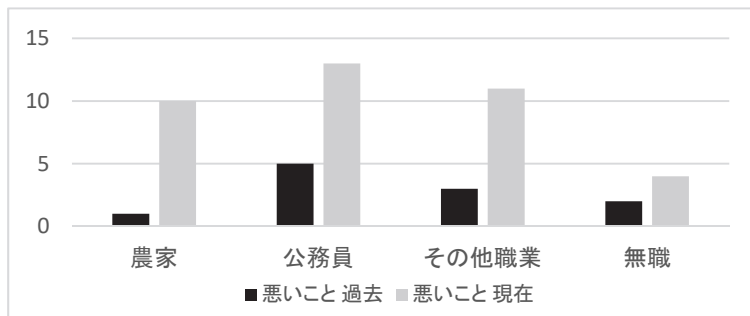


図7-5 職業別のイタチ導入の悪い意識の推移

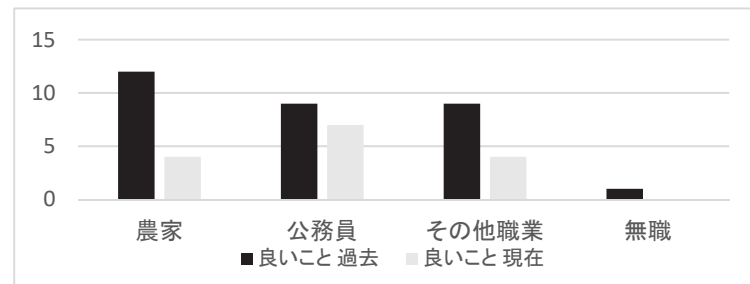


図7-6 職業別のイタチ導入の良い意識の推移

3) 実際に数が減っていると感じる生物 (5種) はいますか？

1. キシノウエトカゲ 2. ミヤコカナヘビ 3. キノボリトカゲ 4. ヘビ類 5. ミヤコヒキガエル

キシノウエトカゲ、ミヤコカナヘビ、キノボリトカゲの3種とヘビ類は数が減少していると考えている人の割合が50%以上と高く、ミヤコヒキガエルは数が変わらないと考えている人が多い結果となった(図7-7)。

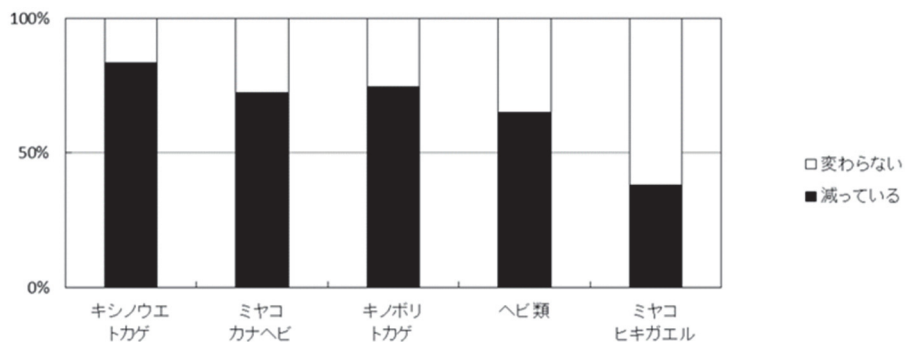


図7-7 希少種における生息数の変化の住民意識

4) 今後、宮古諸島のイタチをどうするのが良いとお考えですか？

「根絶するまで」もしくは「数を減らす程度」を合わせると47%、「このままの状態」の18%を大きく上回り、何らかの対策の必要性を感じている住民が非常に多い結果となった。

表7-8 今後のイタチ対策における住民意識

今後の対策	回答数	回答率
根絶するまで	26	19%
数を減らす程度	39	28%
このままの状態	24	18%
わからない	43	31%
その他	5	4%
計	137	100%

⑥ 宮古諸島でイタチを見たことがありますか？

イタチを見たことがあるが約70%で多くの人がイタチを目撃していた（図7-8）。目撃時間帯は昼が最も多く、次いで夕方となった（図7-9）。目撃頻度は年に数回が約50%と高く、目撃場所は田畑が約60%となった（図7-10～図7-11）。

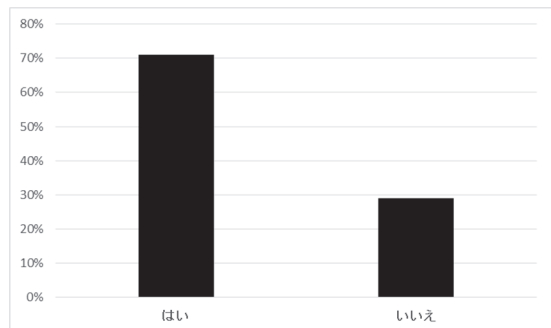


図7-8 イタチ目撃経験

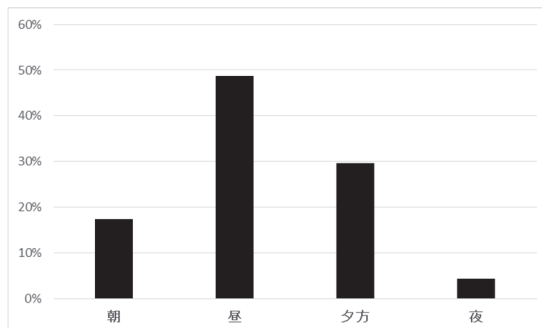


図7-9 イタチ目撃時間帯

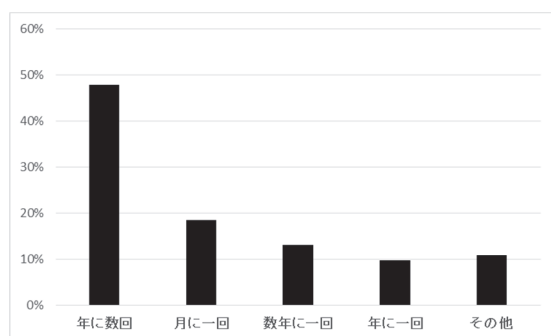


図7-10 イタチ目撃頻度

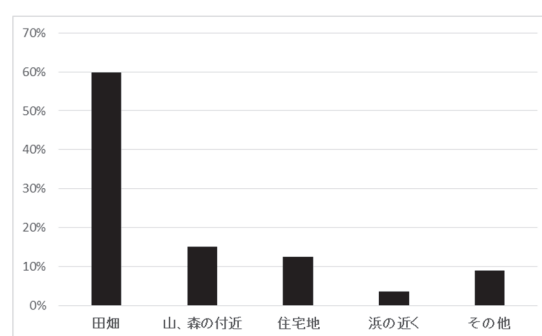


図7-11 イタチ目撃場所

⑦ 方言名をご存知の物はありますか

ヒアリングを行ったキシノウエトカゲ、サキシマキノボリトカゲ、ミヤコトカゲ、ミヤコカナヘビ、ミヤコヒキガエルについて方言名を聞いたところ、すべての種について回答を得ることができた（表7-9）。1種につき多数の方言名があり、キシノウエトカゲは10種類の方言名の回答があり、人の生活と密接にかかわっていたものと推測された。

表7-9 宮古諸島における在来種5種の方言名

種名	方言名
キシノウエトカゲ	バカグウア、バカグウザ、バカギヤ、バカグサ、バキュガ、バカギジャ、バカゲザ、バカツザ、ハイスグルクン、クースファイヤ
サキシマキノボリトカゲ	バカグサ、パズガザ、クーフィハイヤ、タウヤーヅミヤ、ミンジャヤーズミ
ミヤコトカゲ	バガグザ、ウナグ、ツバギガツザ
ミヤコカナヘビ	ジュミー、パウ、ヤージシャ、クースファイヤ、マオナズボウ
ミヤコヒキガエル	カーフンタ、カーフナタ、ウンタ、フナタ、フンタ、マナタ、マンタ、ガマ

7.5 まとめ

外来種という言葉の意味と認知度は比較的高く、インドクジャクやアフリカマイマイなどの比較的身近な外来種は認知していた。在来種については過去に比べると在来種が減少しているという認識を持った人が多い結果となり、現状の在来種の生息状況をある程度把握できているものと考えられた。

イタチに関しては、導入時は良いものと考えている人が多く、当時のネズミによる農業被害の大きさが影響していると考えられた。現在では農業従事者でさえ、イタチが自然生態系にとって良くないものとする人が多く、イタチ導入によるネズミの被害軽減につながっていないこと、近年の外来種問題の意識の高まりなどが影響している可能性が考えられる。また、導入時に約50%、現在は約36%が関心なし、あるいはわからないとの回答があり、外来種の侵入を理解しているものの、それがどのような影響を及ぼすか何が問題なのかが把握できていない人も多いと考えられる。今後、イタチをどうすべきかについては約半数の人が低密度化もしくは根絶を目指すべきと考えており、現状維持の意見を大きく上回っていることは外来種問題を進めていくうえで非常に有益な情報となる。

8. 作業部会委員

8.1 作業部会

イタチ対策を専門的知見から評価するための作業部会の委員については下記に示した（表 8-1）

表 8-1 作業部会委員

区分	氏名	所属・役職
有識者	戸田 守	琉球大学 熱帯生物圏研究センター 准教授
	中西 希	琉球大学 理学部 博士研究員
	亘 悠哉	森林総合研究所 主任研究員

平成 29 年度 外来種対策事業（イタチ対策） 報告書

平成 30 年 3 月

発注者 沖縄県環境部自然保護課
〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎 1-2-2
TEL 098-866-2243 FAX 098-866-2240

請負者 八千代エンジニアリング株式会社 沖縄事務所
〒900-0015 沖縄県那覇市久茂地 3-21-1
TEL 098-880-8081 FAX 098-880-8086